

2020. 10. 4 第一主日礼拝

I コリント 8:1-13 「人を育てるのは知識、それとも愛」

聖書

- 1 次に、偶像に献げた肉についてですが、「私たちはみな知識を持っている」ということは分かっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。
- 2 自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。
- 3 しかし、だれかが神を愛するなら、その人は神に知られています。
- 4 さて、偶像に献げた肉を食べることについてですが、「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」ことを私たちは知っています。
- 5 というのは、多くの神々や多くの主があるとされているように、たとえ、神々と呼ばれるものが天にも地にもあったとしても、
- 6 私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至るからです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在するからです。
- 7 しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんできたため、偶像に献げられた肉として食べて、その弱い良心が汚されてしまいます。
- 8 しかし、私たちが神の御前に立たせるのは食物ではありません。食べなくても損にならないし、食べても得になりません。
- 9 ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように気をつけなさい。
- 10 知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら、その人はそれに後押しされて、その良心は弱いのに、偶像の神に献げた肉を食べるようにならないでしょうか。

- 11 つまり、その弱い人は、あなたの知識によって滅びることになります。
この兄弟のためにも、キリストは死んでくださったのです。
- 12 あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。
- 13 ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません。

はじめに

私はクリスチャン1世で、未信者の家庭で育ちクリスチャンになりましたから、クリスチャンとはどのような振る舞いをする者なのか知りませんでした。先に救われた先輩クリスチャンの振る舞いを見て、クリスチャンとはこのように振舞う者なのだということを学んできました。しかし、今考えてみると先輩クリスチャンたちの振る舞いが、果たして聖書的であったのかどうかはわかりません。結局、私の行動は見様見真似の作りものであって、聖書の知識に戻った行動とは言えなかったのです。人からなぜあなたはそのような行動をするのですかと問われたとき答えることができないのです。Iコリント8章は偶像にささげた肉を食べても良いのかどうかという問題を扱っています。パウロは食べるのか食べないのかという行為の問題ではなく、行為の背後にある動機や理由に目を向けるように促しています。人を大切にする動機から私たちの行動が生まれるなら、それはすばらしいことです。

1. 偶像にささげた肉の問題

当時のギリシャでは動物がいけにえとしてささげられた場合、一部は祭壇で焼かれましたが、後のものは一部が祭司のものとなり、残ったものは礼拝者に戻されました。戻された肉はその場で食べるか、家に持ち帰って食べるか、または市場に売りに出すかなどして片づけられたのです。国の祝い事でささげられた動物も最終的には市場に流れる仕組みになっていました。市場で売られている肉は、純粹に食用として売られている物もあれば、偶像にささげた肉として売られている物もあり、後者の肉についてクリスチャンの中

には食べても良いのか悩む人たちがいたのです。偶像にささげた肉を食べたら、偶像礼拝の罪を犯してしまうのではないかと心配する人たちが出てきたのです。

そもそも偶像って存在するのでしょうか。聖書は「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」（4節）と、神々と呼ばれるものがあつたとしても、それは神ではなくイエス・キリストのみが唯一の神であると言っています。唯一の神であるキリストを信じるクリスチャンにとり、偶像は存在しないのですから、偶像にささげた肉に特別な意味はなくタダの肉です。このような「知識」を持ったクリスチャンにとっては、市場で売られている肉の出所が何であろうと問題なかったのですが、クリスチャンだからと言って皆がそのような知識を持っているわけではありません。特にこれまで偶像に親しんできた人がクリスチャンになった場合、過去の習慣から解かれるのは簡単ではありませんから、そうした人への配慮は大切になってきます。

2. 愛による行動

聖書に基づいた知識によって行動している人は、自分の行動に確信をもっていますので、それを人にも当てはめる傾向が強くなります。先ほどの肉を例に上げれば、本当に食べても大丈夫だろうかと不安がっている人に、そんなのは何の問題もないから大丈夫だと言って、ためらう人に向かって自分の確信を押しつけるなら、「弱い良心」（7, 9, 10, 12節）を傷つけることになってしまうと警告します。それは相手の良心を踏みにじり傷つけるだけでなく、「キリストに対して罪を犯している」（12節）ことになるのです。

なぜ、キリストに対して罪を犯すことになるのでしょうか。それは「その弱い人は、あなたの知識によって滅びることになります。この兄弟のためにも、キリストは死んでくださった」（11節）からです。同じことがローマ 14:15にも書かれています。「もし、食べ物のことで、あなたの兄弟が心を痛めてい

るなら、あなたはもはや愛によって歩んではいません。キリストが代わりに死んでくださった、そのような人を、あなたの食べ物の中で減ぼさないでください。」キリストは私のために死んでくださったのですが、この人のためにもあの人のためにも死んでくださったのです。キリストがいのちまで捨てて愛してくださった人を、食べ物の中で悲しませ、減ぼしてはいけません。私は、こうでなければならないという自分の考えが強いタイプで、異なる考えを受け入れる幅が狭い人間です。良く考えればどちらでも良いことなのに、自分と違う行動をする人に向かって、「あなたは考えが浅い、何も考えていない」と切り捨ててしまうタイプの人間でした。そのような私をイエスさまは長い時間をかけ、時には失敗することも織り込み済みで、忍耐をもって育ててくださいました。まだまだ造り変えられなければならない点はたくさんありますが、それでもイエスさまを知ったことで少しは変えていただきました。感謝しています。

もし私の「知識」が人を縛り、苦しめているなら、それは愛によって行動しているのではありません。愛によって行動がなされるころには、自由や平安や喜びが伴います。なぜなら、聖霊によって神の愛が私たちの心に注がれており（ローマ 5:5）、その聖霊がおられるところには自由があるからです（Ⅱコリント 3:17）。逆に知識だけで行動すると、自分の考えと違う人を批判し、非難ばかりを与えてしまい人を委縮させてしまいます。「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」（1 節）とは実に的を射たことばです。

3. 人を育てるのは愛

「愛は人を育てる」というとき、パウロは具体的にどんなことを考えたでしょうか。先ほど来の「肉」を例にすると、「食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません。」（13 節）と、信仰の弱い人を躓かせないために、肉は食べないと決意しています。こうした対応に皆さんはどう思われるでしょうか。そこまでする必要があるのだろうかとか疑問に思う人がいるかもしれません。そこまで要求され

でもそれは私にはできないという人もいるでしょう。確かに、このパウロの選択を同じように私たちに要求されたらきっと戸惑うでしょう。

肉を食べるか食べないかという行為の前に、「兄弟をつまずかせないために」（13 節）という動機を大切にしなければいけません。その動機が愛から出ていることが大事なのです。その愛は兄弟姉妹を躓かせないという人間的な配慮とともに、イエスさまが愛しておられる人をイエスさまと同じように愛することから出て来るものです。イエス様を愛する愛の証として、兄弟姉妹を大切にすることです。人を大切にすれば人は育っていきます。世の中でも、人を大切にすれば企業は残って行くと言われていました。世の企業でさえそうなのですから、教会はもっと「人を大切にすれば」として情報を発信していかなければいけないと思います。教会が人を大切にすれば理由は、世の理由とは違います。イエスさまが一人の人のために死んでくださったのであり、その一人は私であり、この人であり、あの人なのです。このような豊かな愛を身に付けて歩むなら、間違いなく人間関係も良いものになっていくでしょう。

まとめ

人にはそれぞれ考え方の違いがあります。持っている知識や経験の違いがあります。その違いを認め、お互いに理解を深めるために寄り添って歩んで行きましょう。たとえ、何かを要求できる権利を自分が持っていたとしても、権利を使うことで相手を悲しませるなら、権利を放棄することができるように祈りましょう。それこそが本当の自由というものではないでしょうか。イエスさまはその自由を私たちに教えてくださいました。なぜなら、イエスさまは神としての権利を放棄し人として生まれ、最後は人の罪を背負って十字架で死んでくださいました。ご自分を捨て続けた生涯だったのです。それは一人の人を罪から救う愛から出ているのです。

「愛する者たち。私たちは互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛がある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者は

神を知りません。神は愛だからです。神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた、互いに愛し合うべきです。」（Ⅰヨハネ 4:7-11）。今週も神さまの愛によって互いに愛し合って歩もうではありませんか。祝福をお祈りします。